

第4節 遺物

遺物は北側区で集積状遺構内の台石・石皿類が1点のみ出土し、他は全て南側区からの出土である。出土遺物は土器片・石器類で、縄文時代早期に位置づけられるものである。

1 集積状遺構内石器（第11・12図）

北側区で検出された砾の集積状遺構で、集石内の砾のうち1は台石・石皿類である。石材は砂岩である。中心部に若干窪んだ磨面が見受けられる。

2 土器（第36図～44図2～49、54～126）

土器片は南側区より出土した。外面の文様は貝殻条痕文を施しているものが主体である。文様・施文方法・器形などでI類からIX類に分類した。番号を付けて取上げた土器片は356点である。

I類土器（第22図2～3、5～7、9、12～13・第28図25～29・第39図・第40図83～95）

外面に貝殻条痕文を施しているものである。文様のパターンや口唇部など土器の施文方法によりa～d類に細分する。

I a類土器（第37図54～55）

2点のみが該当する。口縁部外面に縦位の貝殻連続刺突文を横位に1条施し、口唇断面は内面に傾斜するものである。54は口唇部に浅く間隔が短い約1cm単位の貝殻条痕を連続的に施し、正面観はやや波をうち小波状を呈するものである。胴部外面は貝殻条痕が施される。内面はナデ調整が施されている。55は口縁部に幅約1cm位の横位の連続貝殻刺突が1条施されている。口唇部には貝殻条痕、刻み、刺突などは見られないが、口唇部断面は内面に傾斜するものである。胴部は横位の貝殻条痕が施されている。

I b類土器（第26図15～20、第37図56）

口縁部に斜位の貝殻刺突を横位に連続的に施すもので、平口縁にはならず、ゆがみが有り、2～3の段をもつ可能性があるものである。15から20、56が該当し、これらは同一個体である。内面の調整はナデ調整が行われ、胴部外面には斜位の貝殻条痕が施されている。

I c類土器（第37図57～61）

口縁部に縦位の貝殻刺突文を連続的に横位に施すもので、口唇部断面はいくらか内面に傾斜する。胴部は幅狭の浅い貝殻条痕文を横位に施すものである。



第35圖 全遺物出土狀況

I d 類土器 (第 37 図 63 ~ 65)

口縁部に横位の貝殻刺突文を横方向に施すものである。口唇部断面は水平もしくは、いくらか内面に傾斜する。63 は 2 段あるいは 3 段の稜を持つものであり、口唇部は指ナデによって調整が行われており、そのため僅かながら段がついている。胴部は細めの横位・斜位の貝殻条痕文が施されている。

貝殻条痕文の胴部片は I 類土器とし、細分はしなかった。幅狭の貝殻条痕文は I c 類とするか迷ったが、胴部片だけで決定するのは難しく、あえて I 類土器としている。29 は底部で、橢円形を呈する。裏面に貝殻条痕文の調整痕が見られるため I 類土器に入れたが、他の類の底部であることも考えられる。

II 類土器 (第 28 図 30 ~ 35・第 30 図 34 ~ 37・第 39 図 96・第 41 図 97 ~ 98)

外面に貝殻押引文、貝殻条痕文を施しているものである。

30 から 37 は集中出土地 3 から出土したもので、焼成・胎土などから同一個体であると思われる。胴部片が多く、外面、内面ともに磨耗したものが多く、文様ははっきりしないが、わずかながら貝殻条痕文、押引文がみうけられる。34 は平底の底部である。96 は上位に 4 条の貝殻押引文が横位に施され、中心部から下位は横方向の貝殻条痕文が施されている。器壁は比較的薄く、内面はナデミガキ調整が行われている。97 は上位に 2 条の細かい連点状の貝殻刺突文が横位に施され、その下位には横位の貝殻押引文が数条施されている。非常に器壁の薄い土器である。98 は横位の浅い貝殻押引文が施されている。97 と同様器壁の薄い土器である。

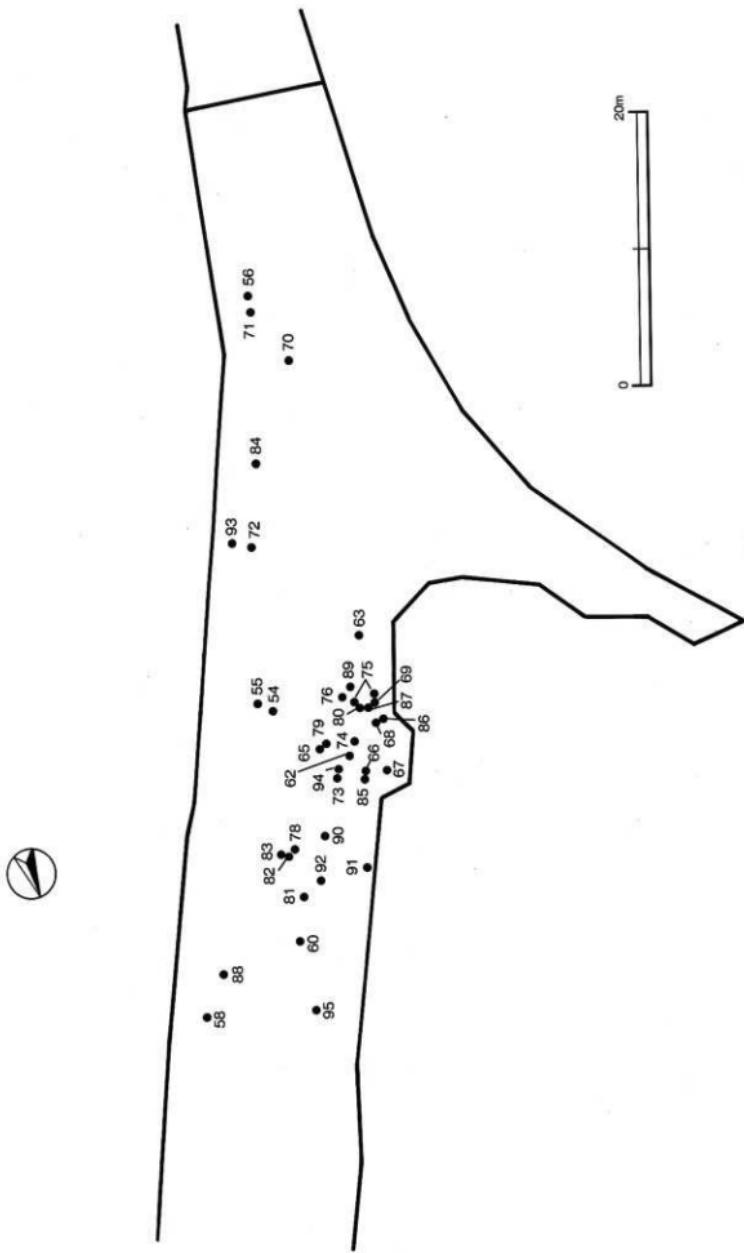
III 類土器 (第 22 図 4, 14・第 41 図 99)

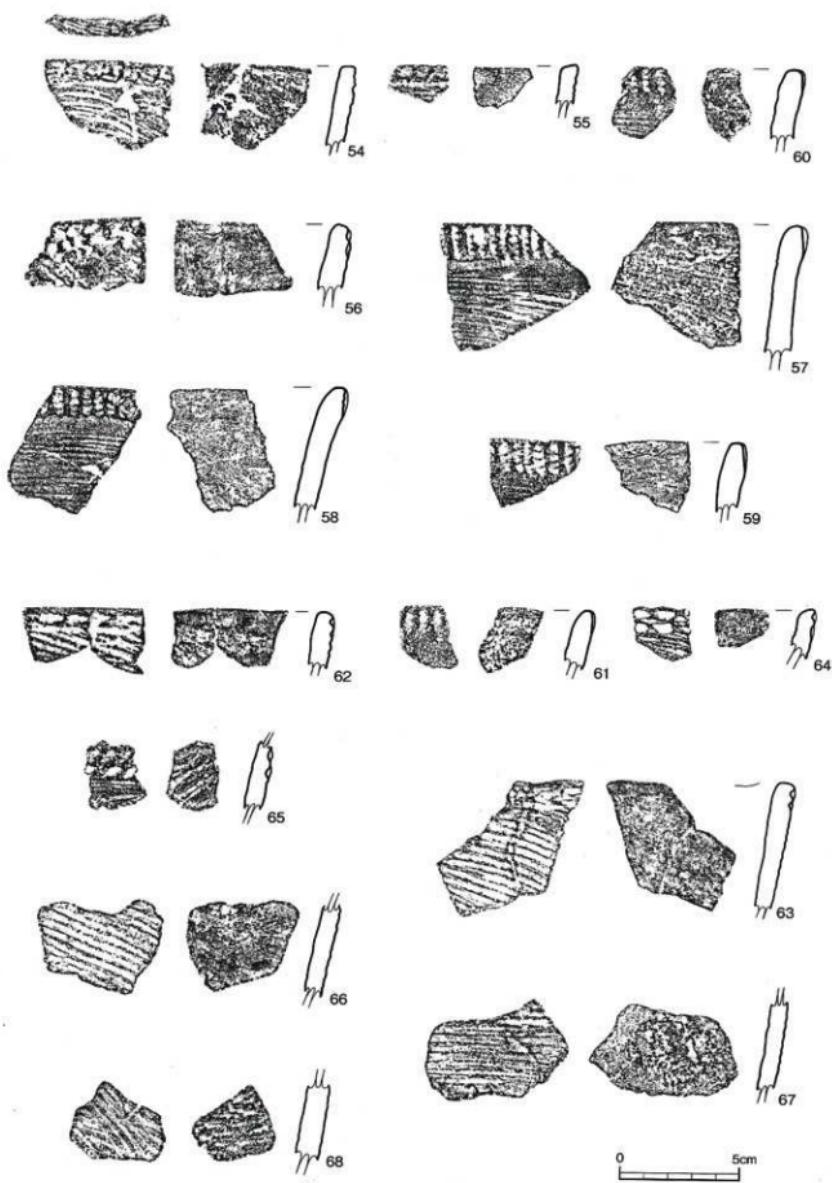
外面に貝殻刺突文を施すものである。3 点のみが該当する。4 は 3 号配石内から出土したもので、磨耗によりはっきりしないが、外面に横位に連点状の貝殻刺突文が見られる。14 は 6 号集石内から出土した底部片である。連点状の貝殻刺突文が見られる。99 は二枚貝の肋を用いて横位に 4 条の刺突を施している。

IV 類土器 (第 30 図 38 ~ 41・第 42 図 100 ~ 102)

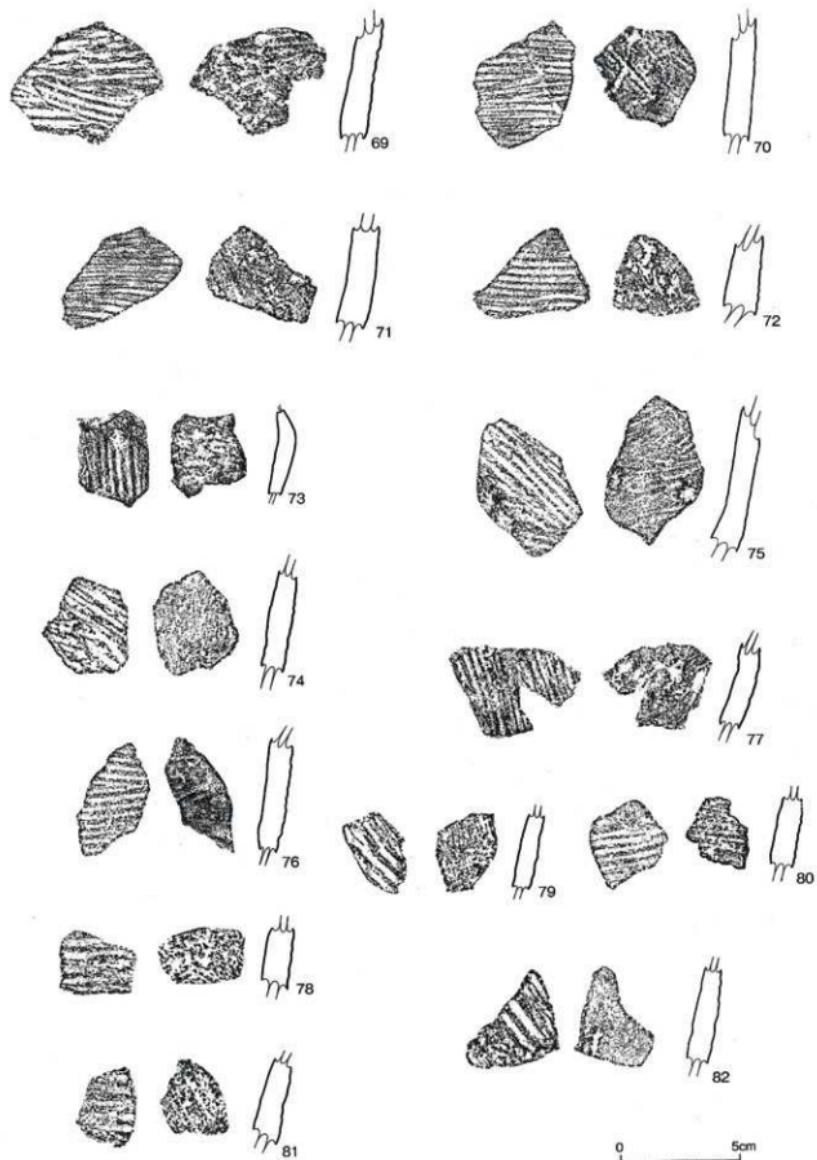
外面に工具類で施文を施しているものである。工具は纖維質のハケ状のもの、棒状の工具を用いている。棒状の工具では刺突を行っている。38 は口唇部に刻みが入り、棒状の工具を用いた連点状の刺突が横位に 3 条施されている。刺突は不規則である。また纖維質のハケ状工具を用いた横位の施文が施され口縁部はゆるやかに波状するものと思われる。39 ~ 41・100 ~ 102 は纖維質のハケ状工具を用いた施文が行われている。器壁の厚い土器である。

第36図 I類土器出土状況

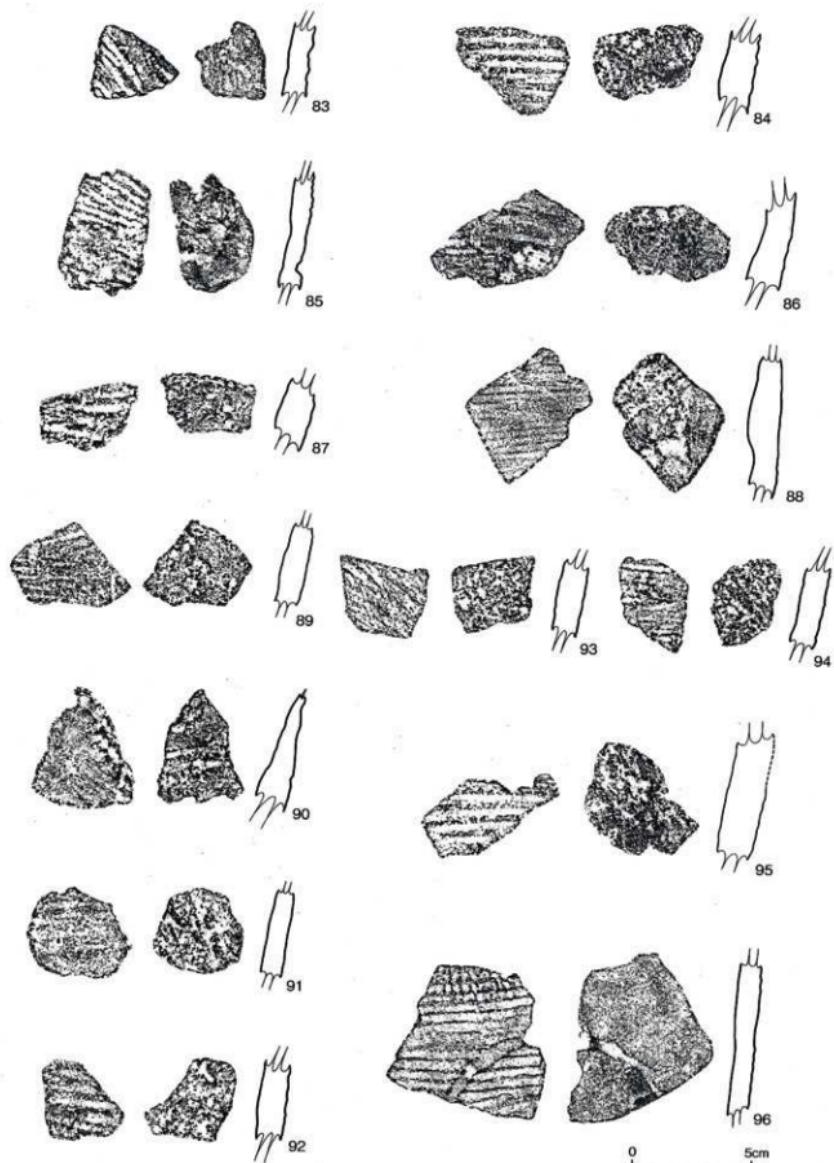




第37図 出土遺物(1)

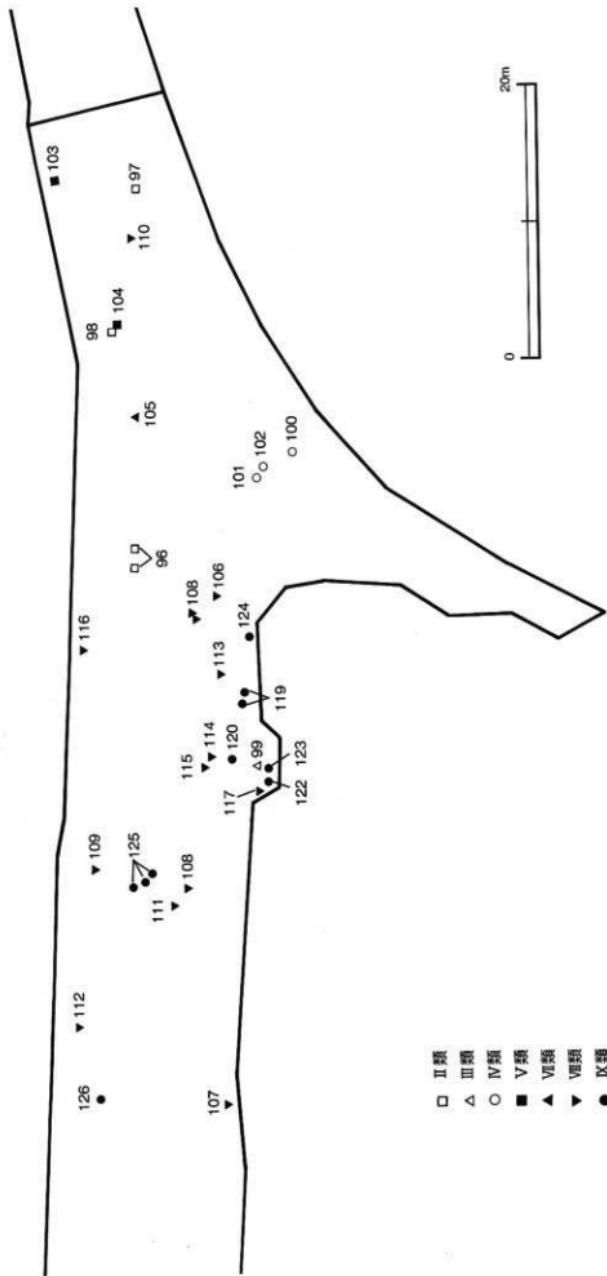


第38図 出土遺物 (2)



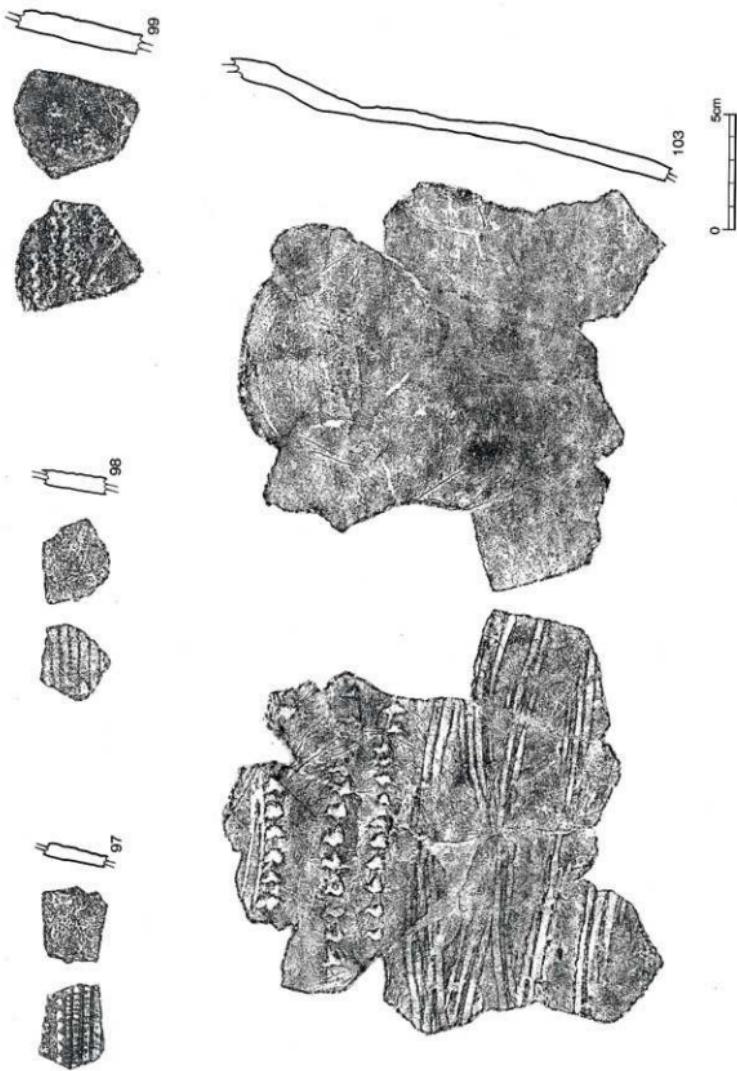
第39図 出土遺物 (3)

0 5cm



第40図 II~V類、VI~IX類土器出土状況

第41図 出土遺物(4)



V類土器（第32図42～48・第41図103・第42図104）

貝殻刺突文・貝殻条痕文を外面に施し、器形は口縁部がラッパ状に外反するものである。42～48は遺物集中出土地5から出土したもので同一個体である。縦位の貝殻刺突文を横方向に4条施し、貝殻刺突文の下位に横方向の貝殻条痕文を施すものである。器壁はやや厚めの土器である。103は3条の貝殻刺突文を横位に施し、この3条の刺突文を挟んで上下に横位、斜位の浅い貝殻条痕文を施すものである。器壁の薄い土器で、胎土に金雲母、小礫が多く含むのが特徴的である。104は口縁部である。口唇部に幅0.5cm～1.0cm程度の刻みが3箇所有り、内面中央部には指ナデの痕跡が確認される。外面には粘土を瘤状に貼り付け肥厚させた突起がみられる。口縁部がラッパ状に外反するものであるため、V類土器とした。

VI類土器（第33図49）

器形は口縁部から直行するもので、外面に貝殻条痕文を施しているものである。49は遺物集中出土地6から出土した土器片を、接合したものである。VI類土器はこの土器のみが該当する。外面、上半分には斜位の貝殻条痕文を交差するように施している。内面はナデ調整である。

VII類土器（第42図105）

105の1点が該当する。器形は傾きがきつくなり、外側に向かって開くものである。浅鉢ではなく、別の器種の可能性もある。口唇断面部は外面に傾斜し、外側に工具での刺突文が4箇所施されている。刺突文の下位には、非常に浅い貝殻条痕文を施している。内面は工具を用いてのナデ調整を行つており、口唇部が内面に向かって、若干張り出しているため口縁部との間に段が形成されている。

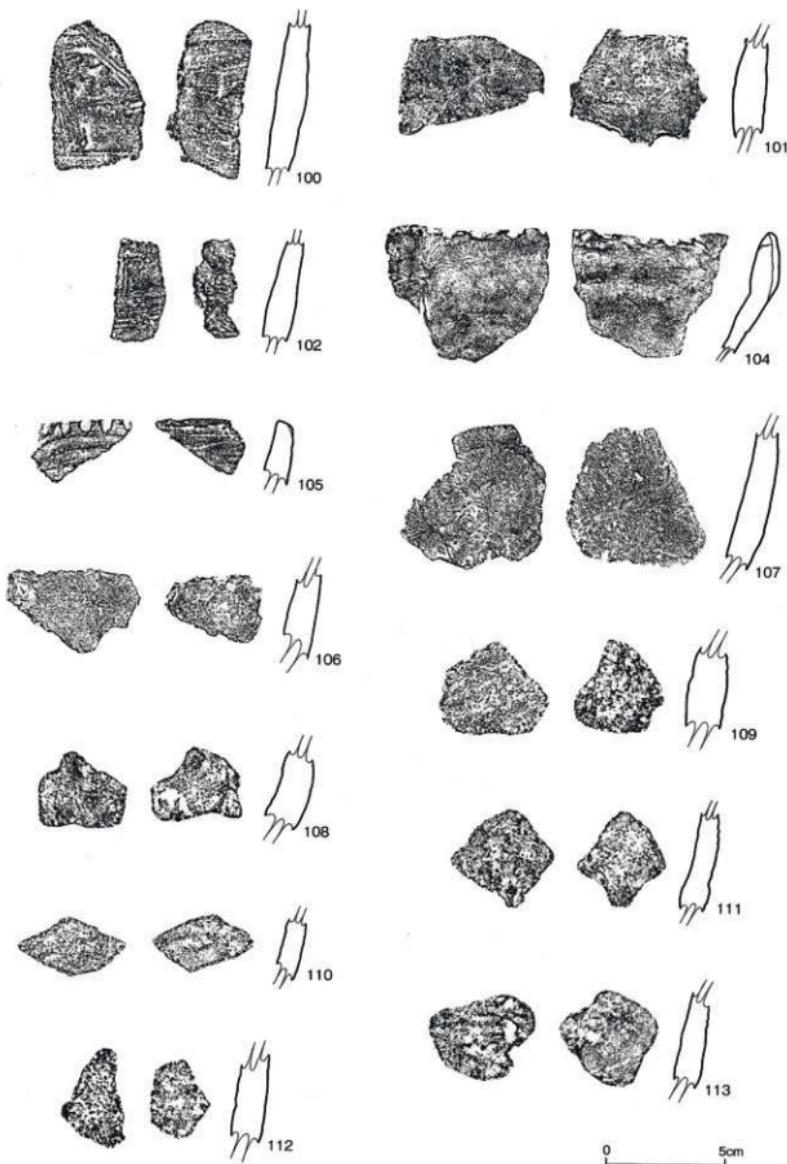
VIII類土器（第42図106～113・第43図114～118）

無文の胴部及び磨耗が激しく文様不明な胴部とした。
貝殻条痕文と思われるものも数点含まれているが、磨耗が激しいため、はっきり選別できないものが大多數を占める。

IX類土器（第43図119・第44図120～126）

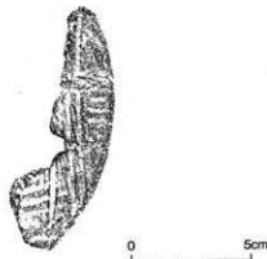
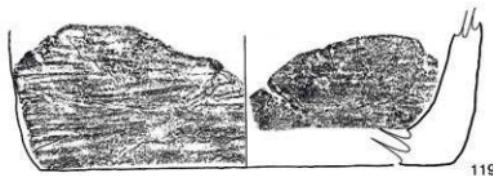
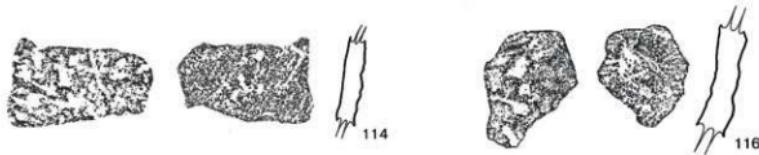
底部片を一括した。

119は浅い横位の貝殻条痕文を施しているものである、平底になる。底面には纖維質の圧痕が見られる。120は外面に斜位の貝殻条痕文が施され、平底になる。器壁の厚い土器である。121～123は磨耗が激しく外面の文様を判断することは困難である。126は内面に指頭の圧痕が数箇所見受けられる。底部片は全体にわたって磨耗が激しい感がある。



第42図 出土遺物(5)

0 5cm



第43図 出土遺物(6)



120



121



125



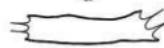
122



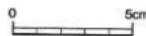
123



124



126



第44図 出土遺物(7)

第6表 土器觀察表(1)

掲番	番号	器種	部位	分類	施文・調整		色調		胎土	焼成	取上番号
					外面	内面	外面	内面			
37	54	深鉢	口縁部	I a	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	黒茶褐色	暗黃茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	495
	55	深鉢	口縁部	I a	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	黒茶褐色	暗黃褐色	石英・長石・砂粒	良好	390
	56	深鉢	口縁部	I b	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	黒褐色	黃茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	665・636
	57	深鉢	口縁部	I c	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	697
	58	深鉢	口縁部	I c	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒 繩	良好	591
	59	深鉢	口縁部	I c	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒 繩	良好	一括
	60	深鉢	口縁部	I c	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	597
	61	深鉢	口縁部	I c	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	550
	62	深鉢	口縁部	I d	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	灰黑褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	250
	63	深鉢	口縁部	I d	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	黒褐色	暗茶褐色	石英・長石・砂粒 繩	良好	184
	64	深鉢	口縁部	I d	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	一括
	65	深鉢	口縁部	I d	貝殻刺突 貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	500
	66	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	247
	67	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰黑茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	245
	68	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 繩・雲母	良好	223
38	69	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	216
	70	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	388
	71	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	667
	72	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	7
	73	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	灰黃褐色	石英・長石・砂粒	良好	258
	74	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	425
	75	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	灰黃茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	212
	76	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	416
	77	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	206
	78	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	525
	79	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	421
	80	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	213
	81	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	灰黑褐色	石英・長石・砂粒	良好	297
	82	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデケズリ	黄茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	526
39	83	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	529
	84	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰黃茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	376
	85	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	赤褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒 繩	脆	264
	86	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	黑褐色	石英・長石・砂粒 繩	良好	224
	87	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黃茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	216
	88	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	594
	89	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黃茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 繩	良好	199

第7表 土器観察表(2)

挿図	番号	器種	部位	分類	施文・調整		色調		胎土	焼成	取上番号			
					外面		内面							
					外面	内面	外面	内面						
39	90	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	287			
	91	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	341			
	92	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黑茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	301			
	93	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	灰黑褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	10			
	94	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	257			
	95	深鉢	胴部	I	貝殻条痕	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	脆	558			
	96	深鉢	胴部	II	貝殻押引 貝殻条痕	ナデ ミガキ	灰黃褐色	灰赤茶褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	400-402			
41	97	深鉢	胴部	II	貝殻押引 貝殻条痕	ナデ	灰黑茶褐色	灰黃褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	759			
	98	深鉢	胴部	II	貝殻押引 貝殻条痕	ナデ	灰黃褐色	灰黃褐色	石英・長石・砂粒 雲母	良好	104			
	99	深鉢	胴部	III	貝殻刺突	ナデ ミガキ	黑茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	237			
42	100	深鉢	胴部	IV	貝殻条痕	ナデ ミガキ	灰茶褐色	灰褐色	石英・長石・砂粒	良好	60			
	101	深鉢	胴部	IV	貝殻条痕	ナデ ミガキ	灰茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	85			
	102	深鉢	胴部	IV	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	灰黑褐色	石英・長石・砂粒	良好	59			
41	103	深鉢	胴部	V	貝殻刺突 貝殻条痕 沈線	ナデ ミガキ	灰黃茶褐色	灰黃褐色	石英・長石・砂粒 金雲母	良好	727-728- 730-731- 732-734- 735-768- 769-770- 818-821- 822			
	104	深鉢	口縁部	V	貝殻刺突	ナデ ミガキ	灰黃茶褐色	灰黑褐色	石英・長石・砂粒 金雲母		良好	674		
	105	浅鉢	口縁部	VI	工具刺突 貝殻条痕	ナデ	灰黑褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	5		
	106	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	181		
	107	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	灰黑茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	453		
42	108	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	灰黃褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	283			
	109	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫		良好	520		
	110	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	640		
	111	深鉢	胴部	VI	貝殻刺突? ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	292		
	112	深鉢	胴部	VI	ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒 礫		良好	38		
	113	深鉢	胴部	VI	貝殻条痕? ナデ	ナデ	茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒		良好	202		
	114	深鉢	胴部	VI	貝殻刺突? 貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤褐色	灰茶褐色	石英・長石・砂粒 礫		良好	334		
43	115	深鉢	胴部	VI	貝殻刺突? 貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	420			
	116	深鉢	胴部	VI	貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒	良好	21			
	117	深鉢	胴部	VI	貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	黑茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	427			
	118	深鉢	胴部	VI	貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	188-189- 190			
	119	深鉢	底部	IX	貝殻条痕	ナデ	灰茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	215-208			

第8表 土器観察表(3)

挿図	番号	器種	部位	分類	施文・調整		色調		胎土	焼成	取上番号
					外面	内面	外面	内面			
44	120	深鉢	底部	IX	貝殻条痕	ナデ	赤茶褐色	黒茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	329
	121	深鉢	底部	IX	貝殻条痕? ナデ	ナデ	灰黄褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	一括
	122	深鉢	底部	IX	貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	灰黄茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	436
	123	深鉢	底部	IX	貝殻条痕? ナデ	ナデ	赤茶褐色	黄茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	436
	124	深鉢	底部	IX	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	192
	125	深鉢	底部	IX	ナデ	ナデ	黄茶褐色	茶褐色	石英・長石・砂粒 礫	良好	521・523・ 524
	126	深鉢	底部	IX	ナデ ミガキ	ナデ	赤褐色	赤茶褐色	石英・長石・砂粒 礫・雲母	良好	595

3 石器類（第34図50～53・第46図～第52図127～175）

石器類は石鎚、スクレーパー、水晶製剥片、磨石・敲石類、台石・石皿類が出土した。

石鎚（第46図127～134）

127から134は石鎚である。うち127～129は磨製のものである。127は全面を丁寧に磨き上げ、基部はまっすぐに仕上げているものである。最大長が3cmを超える比較的大型のものである。128は基部に浅い抉りが入り、先端部は丸みを帯びており、製作途中か製作を途中でやめたものと思われる。129にも基部に浅い抉りが入る。先端部は欠損している。130から134は打製である。131の基部はまっすぐで、やや厚みがあるものである。130・132・133は基部に抉りを持つもので、特に133は抉りが深い。134は未製品である。石材は安山岩、頁岩、ホルンフェルス、黒曜石（姫島産）、片岩が用いられている。

スクレーパー（第47図135～136）

135は剥片を利用したもので、細かい二次加工を行っている。石材は頁岩である。136も細かい二次加工が行われている。小さなつまみ部分が見られ、石匙としての用途が考えられる。石材は頁岩である。

水晶剥片（第47図137～142）

137～142は水晶製の剥片である。出土した水晶剥片は10点であった。縦長長方形、菱形、台形状のものがある。圓化したのは6点であり、残りの4点は小片のため圓化までには至らなかった。本市において、これまで水晶製の剥片は他の遺跡で1、2点の出土報告例はあったが、10点出土したのは初めてのことである。これら水晶剥片は細かい剥離痕がみられ、押圧剥離を行っているものもある。139は透明度が高いものである。水晶は種子島でも産すると言われているが、場所の特定はできていない。なお、今回の調査では水晶製の製品は出土していない。

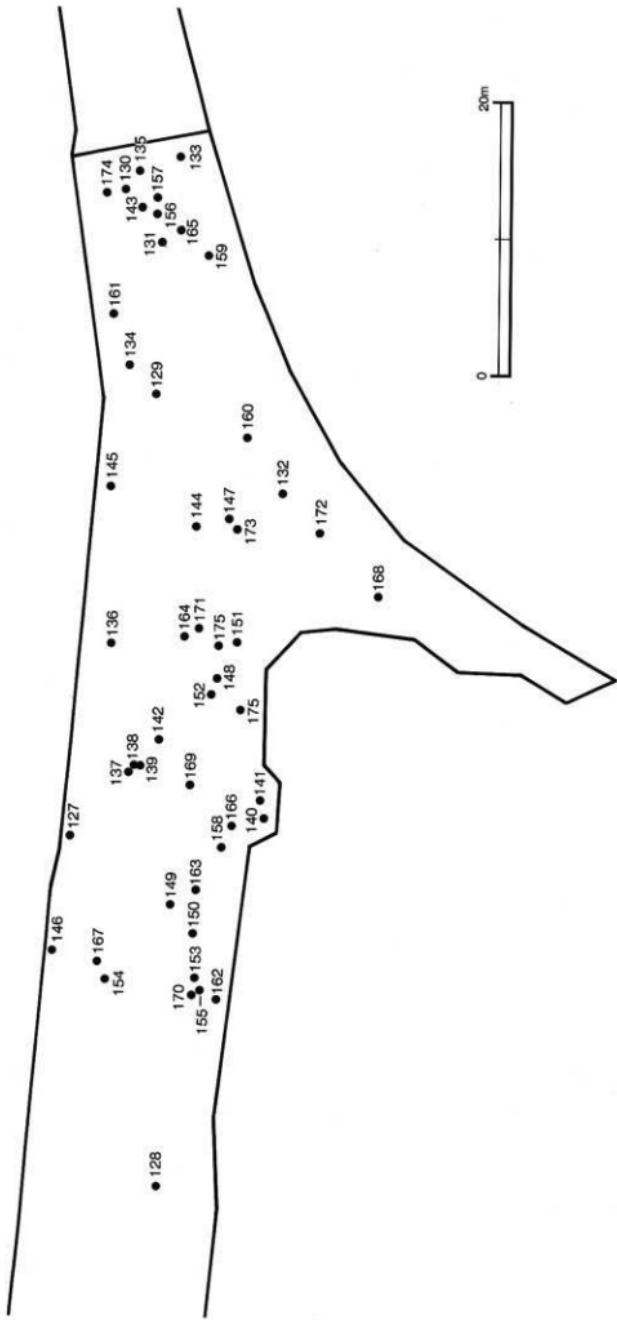
磨石・敲石類（第48図～第52図143～173）

143から173は磨石・敲石類で、網かけは磨り面があるところを表している。出土石器の半数以上を磨石・敲石類が占め石材は全て砂岩である。形状は、円形のもの・梢円形のもの・不定形のものがあり、磨りのみで使われたもの、磨る+敲くの両方に使われたもの、敲きのみで使われたものがある。

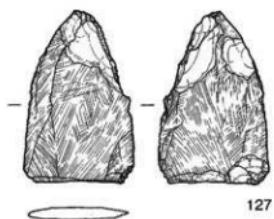
148、161は最大長約15cmの縦長で大型のもので161の厚みは6.8cmで出土した磨石・敲石類の中で最も厚さがあり、重量も1200gで最も重い。148は主に磨りとして、161は磨り+敲くとして使用されたものである。153は先端部が潰れ打痕が見られることから、ハンマーとしての使用も考えられる。

砥石・台石・石皿類（第52図174～175）

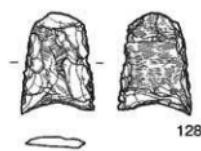
磨石・敲石類の出土は多かったが、台石・石皿類の出土は少なかった。但し、台石・石皿としての使用を考えたと思われる、持ち込まれた自然礫の出土は数十点あった。174は平滑面があり、自然礫を砥石あるいは石皿として利用したと思われる。175は3箇所の敲打痕が見られる台石である。石材はいずれも砂岩である。



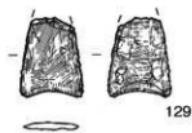
第45図 石器類出土状況



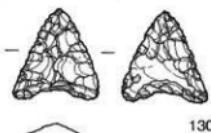
127



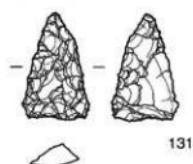
128



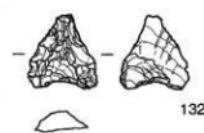
129



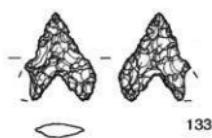
130



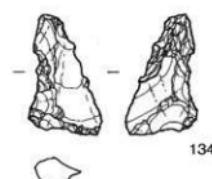
131



132



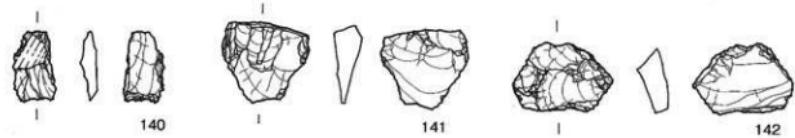
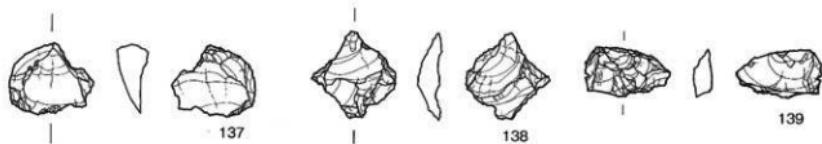
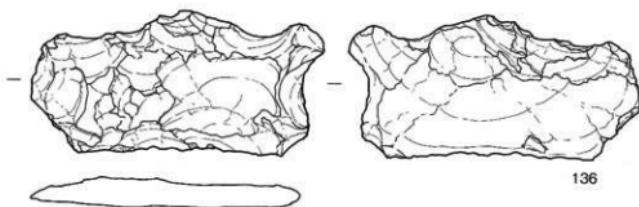
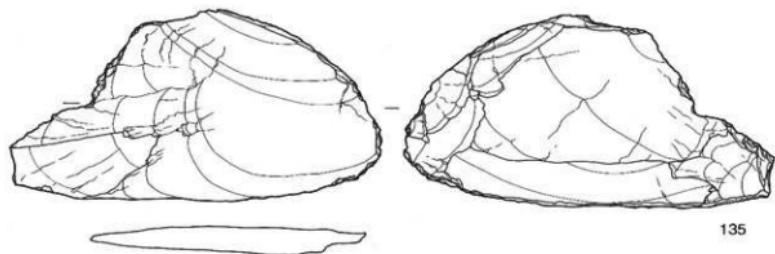
133



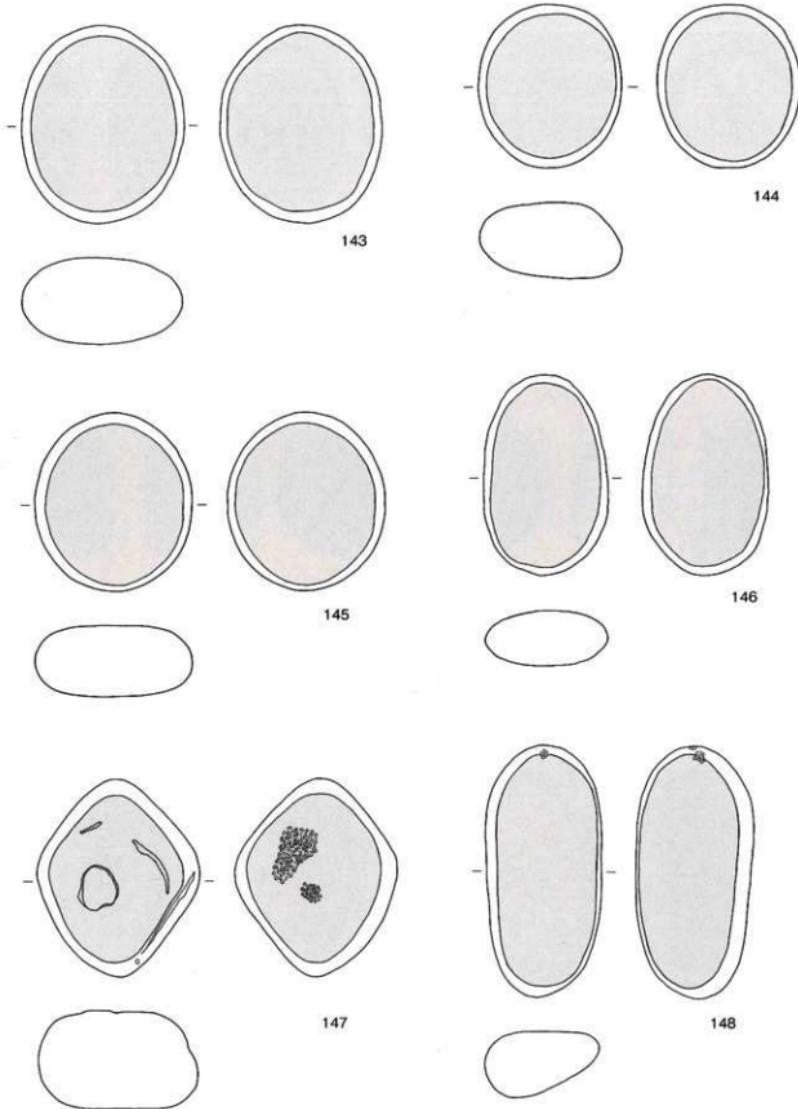
134



第 46 図 出土遺物 (8)

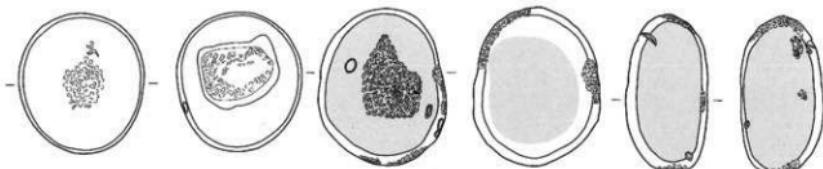


第47図 出土遺物(9)



第48図 出土遺物 (10)

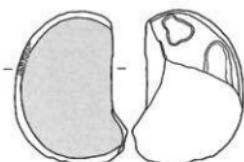
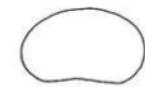
0 10cm



149

150

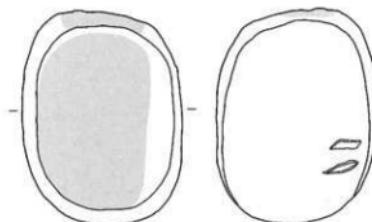
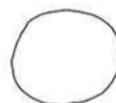
156



151

152

153

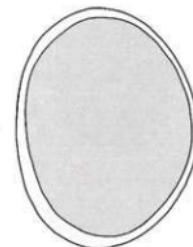
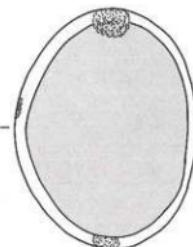


154

155

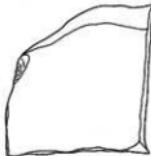
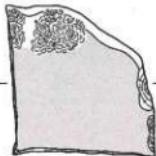
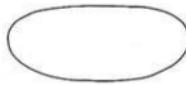
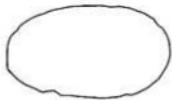


第49図 出土遺物(11)

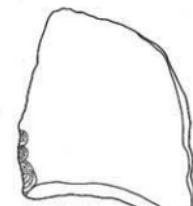


157

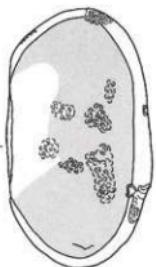
158



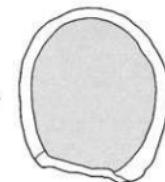
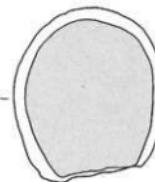
159



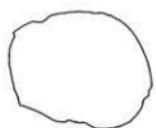
160



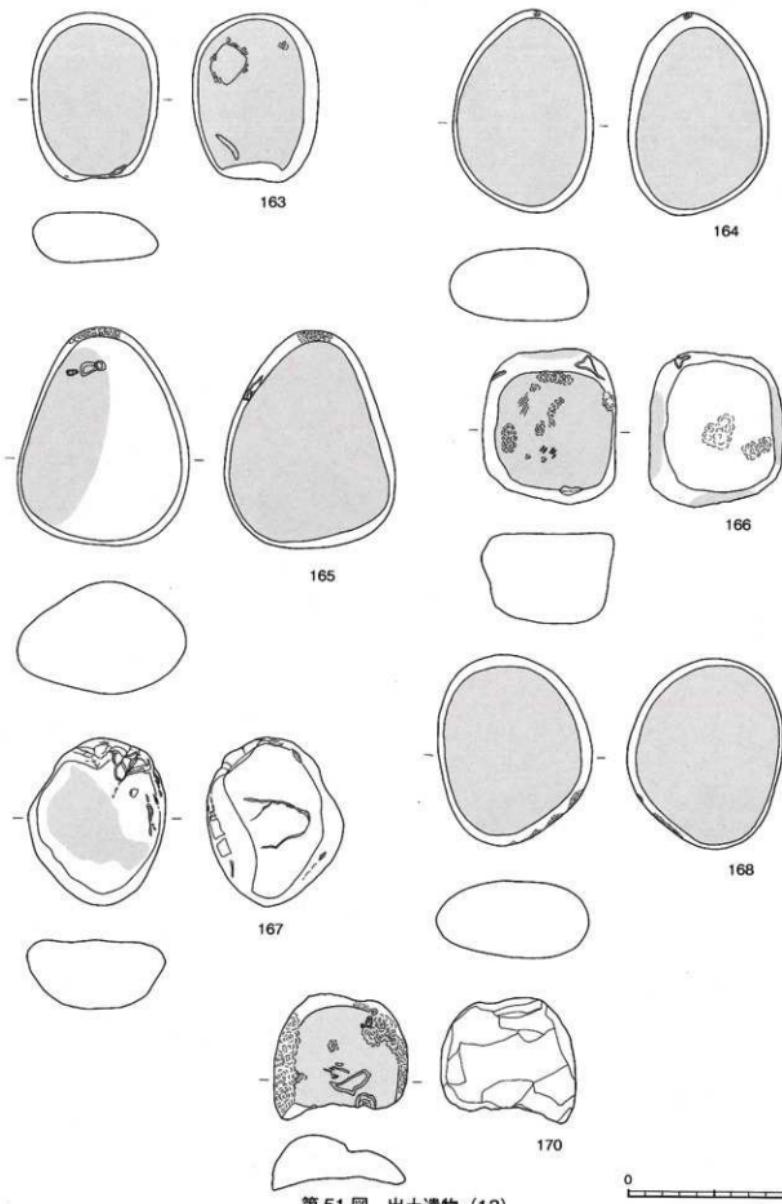
161



162

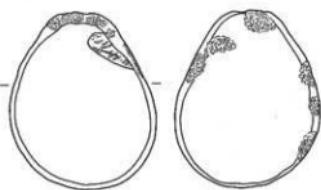


第50図 出土遺物 (12)

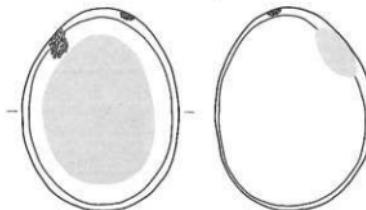


第 51 図 出土遺物 (13)

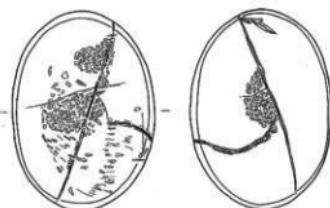
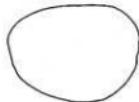
0 10cm



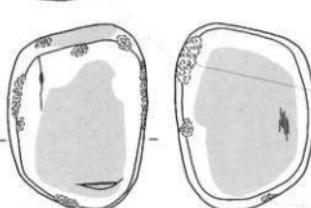
169



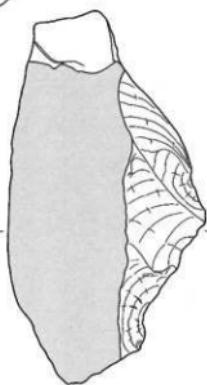
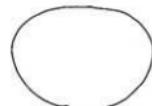
171



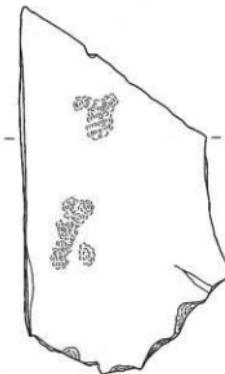
172



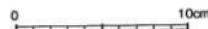
173



174



175



第52図 出土遺物 (14)

第9表 石器観察表

擇団	番号	器種	出土層	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上番号	備 考
46	127	磨製石鏹	IV	安山岩	3.5	2.3	0.2	27	28	
	128	磨製石鏹	IV	頁岩	2	1.5	0.2	0.8	598	
	129	磨製石鏹	IV	ホルンフェルス	1.6	1.3	0.1	0.4	371	
	130	打製石鏹	IV	安山岩	1.8	1.7	0.3	0.9	739	
	131	打製石鏹	IV	黒曜石(姫島産)	2.1	1.3	0.4	0.8	644	
	132	打製石鏹	IV	安山岩	1.5	1.4	0.3	0.6	86	
	133	打製石鏹	IV	黒曜石	1.7	1.3	0.2	0.4	754	
	134	打製石鏹	IV	片岩	2.4	1.5	0.5	1.3	672	
47	135	スクレイバー	IV	頁岩	3.9	7.7	0.5	21.1	800	
	136	スクレイバー	IV	頁岩	2.9	5.6	0.5	11.5	396	
	137	剥片	IV	水晶	1.6	1.3	0.6	1.3	551	
	138	剥片	IV	水晶	1.8	1.8	0.3	0.8	498	
	139	剥片	IV	水晶	0.9	1.7	0.2	0.6	499	
	140	剥片	IV	水晶	1.4	0.8	0.3	0.4	243	
	141	剥片	IV	水晶	1.6	1.8	0.5	1.1	238	
	142	剥片	IV	水晶	1.6	1.8	0.6	1.6	412	
48	143	磨石・敲石	IV	砂岩	11.6	9.5	5.1	804	747	
	144	磨石・敲石	IV	砂岩	9.6	8.5	4.5	531	379	
	145	磨石・敲石	IV	砂岩	10.4	9.3	4.2	600	1	
	146	磨石・敲石	IV	砂岩	11.7	7.1	3.2	426	35	
	147	磨石・敲石	IV	砂岩	11.5	9.6	5.8	845	384	
	148	磨石・敲石	IV	砂岩	14.8	6.7	3.8	600	191	
	149	磨石・敲石	IV	砂岩	8.2	7.3	4.2	350	278	
	150	磨石・敲石	IV	砂岩	9.2	7.5	5	460	291	
49	151	磨石・敲石	IV	砂岩	9.1	6.2	4	255	183	
	152	磨石・敲石	IV	砂岩	81.5	6.68	4.8	320	407	
	153	磨石・敲石	IV	砂岩	8.3	6.7	5.7	471	470	
	154	磨石・敲石	IV	砂岩	12.5	9.4	6	1150	545	
	155	磨石・敲石	IV	砂岩	12.4	9.2	4.2	575	305	
	156	磨石・敲石	IV	砂岩	9.3	4.8	3.2	190	746	
	157	磨石・敲石	IV	砂岩	11.6	9.5	5.4	730	749	
	158	磨石・敲石	IV	砂岩	14	10.6	4.4	933	263	
50	159	磨石・敲石	IV	砂岩	8.7	8.4	3.2	341	651	
	160	磨石・敲石	IV	砂岩	11	10.3	2.4	325	387	
	161	磨石・敲石	IV	砂岩	15.2	8.5	6.8	1200	632	
	162	磨石・敲石	IV	石英	9.9	8.8	4.4	585	308	
	163	磨石・敲石	IV	砂岩	9.7	7.4	2.9	348	274	
	164	磨石・敲石	IV	砂岩	11.8	8.2	4.2	630	187	
	165	磨石・敲石	IV	砂岩	12.7	10	6.5	1002	610	
	166	磨石・敲石	IV	砂岩	9.1	7.8	5.2	555	439	
51	167	磨石・敲石	IV	砂岩	9.8	8.1	4.1	392	541	
	168	磨石・敲石	IV	砂岩	11.2	9	4.4	655	174	
	169	磨石・敲石	IV	砂岩	10.3	8.5	5.6	600	502	
	170	磨石・敲石	IV	砂岩	6.7	7.9	2.6	185	466	
	171	磨石・敲石	IV	砂岩	11.8	9.2	5.9	920	179	
	172	磨石・敲石	IV	砂岩	11.6	8.3	6	842	115	
	173	磨石・敲石	IV	砂岩	10.9	8.2	6.1	735	383	
	174	砥石	IV	砂岩	21.5	11.6	6	1350	793	
52	175	台石・石皿	IV	砂岩	19.2	12	3.3	730	203	

第IV章 科学分析

年代測定については、遺物集中出土地5・6内で採取した炭化物についてパリノ・サーヴェイ株式会社が分析を行った。表題の一部のみを変更して、報告書の原文を掲載することとする。

芦野遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県西之表市芦野遺跡の発掘調査では、アカホヤ火山灰層下位のベージュ色ローム土（IV層）で、縄文時代早期の土器、石器が出土し、集石等が検出されている。今回の分析調査では、土器集中出土地から採取した炭化物を対象に、加速器による放射性炭素年代測定（AMS法）を実施し、この遺物包含層の年代資料を得る。

1. 試料

試料は、IV層の土器集中出土地から採取した炭化物2点（試料番号1～2）、の計2点である。試料の詳細は、結果とともに表1に示す。

2. 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法で実施する。放射性炭素の半減期はL I B B Yの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。試料番号1が $7,720 \pm 50$ BP、試料番号2が $7,460 \pm 40$ BPである。

曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。なお較正曲線は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。測定誤差を σ として計算させた結果、試料番号1がcalBC6,594 - 6,497、試料番号2がcalBC6,393 - 6,257であり、IV層がアカホヤ火山灰層の下位にあることと調和する。

表1. 放射性炭素年代測定結果

遺構	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code.No.
土器集中出土地 5	土壤混じり炭化物	7720 ± 50	-27.11 ± 0.72	7750 ± 50	IAAA-42687
土器集中出土地 6	土壤混じり炭化物	7460 ± 40	-29.87 ± 0.88	7540 ± 40	IAAA-42688

1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。

2) BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

表2. 历年較正結果

遺構	補正年代 (BP)	历年較正年代 (cal)				相対比	Code No.
		σ	cal BC 6,594 - cal BC 6,497	cal BP 8,544 - 8,447	1.000		
土器集中出土地 5	7715 ± 46	2 σ	cal BC 6,635 - cal BC 6,496	cal BP 8,585 - 8,446	1.000	IAAA-42687	
		σ	cal BC 6,393 - cal BC 6,340	cal BP 8,343 - 8,290	0.477		
土器集中出土地 6	7458 ± 42	σ	cal BC 6,314 - cal BC 6,257	cal BP 8,264 - 8,207	0.523	IAAA-42688	
		2 σ	cal BC 6,416 - cal BC 6,239	cal BP 8,366 - 8,189	1.000		

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1 術目を丸めるのが慣例だが、历年較正曲線や历年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1 術目を丸めていない。

第V章 調査のまとめ

第1節 遺構

遺構は疊集積状遺構1基、配石6基、集石8基、土坑1基が検出された。また遺物集中出土地が6箇所あった。北側区で検出された疊の集積状遺構は、検出層から時期区分では旧石器時代末期に相当するものである。当初は疊群の可能性もあったが、疊を観察した結果や検出状態から集積状遺構と判断した。集積は拳大程の砂岩疊7点から構成されている。台石・石皿と思われる磨面の使用痕が見られるものが1点含まれている。同一の疊が破碎したものとも思われたため7点の疊の接合を試みたが、接合できたものはなかった。この集積状遺構は、「状」としたことからもわかるように明らかに集積であるという確証は得がたいものである。疊群の目的で使用するため構築したものか、疊群構築途中で廃棄したものなのか、あるいは石器を作製するために集められたもののかは確証が得られず、疊が熱を受けていない点、周辺から炭化物が検出されなかった点を考慮したうえで、集積状遺構としたものである。他の類例をふまながら今後検討が必要であろう。検出面周辺に生活遺構の存在が考えられ、遺構の精査を慎重に行つたが、確認することはできず、石器製作跡や石器類の出土もなかった。なお、旧石器時代の遺物、遺構は調査地南側区では確認されなかった。

種子島では中部の中種子町、南部の南種子町からは旧石器時代の遺構は確認されていたが、北部に位置する西之表市では初めての発見となるものである。南側区では配石6基、集石8基、土坑1基が検出された。検出層から全て縄文時代早期のものである。

配石は6基検出されたが、南側区の北側よりで3基、南側よりで3基の検出である。すべての配石内からは炭化物は検出されていないが、疊は赤化し熱破碎を受けている配石もある。1号配石で下位に掘り込みが確認されたが、2～6号配石では掘り込みは確認されなかった。1号、3号、4号、5号、6号配石では内部及び周辺から土器片が出土している。

集石は8基検出された。南側区中央部で3基（第1号～3号）、北側で4基（第4号～7号）、南側で1基（第8号）の検出である。集石を構成する疊は全て砂岩で拳大から30cm程の大きさであり、熱を受け赤化し、熱破碎が見られるものもある。2号、4号、5号、6号集石では集石内及び周辺から土器片が出土している。

土坑は南側区北側よりで1基検出された。3号配石に隣接する状態での検出である。土坑は梢円形を呈しており、深さ19cmのものである。土坑内から遺物、炭化物は出土していない。

遺物集中出土地は6箇所確認された。出土層から縄文時代早期のものである。前平式土器が出土した1、吉田式土器が出土した2、型式不明の貝殻を施文に使用しない土器が出土した4、塞ノ神式土器が出土した5・6とあり、調査地最南部に塞ノ神式土器の集中5・6が分布し最北部には吉田式土器が出土した集中3が分布し、前平式土器が出土した集中1は南側よりに分布し、IV類土器とした貝殻を施文しない土器の集中は調査地中央部に分布しており、分布域に偏りがみられ、生活域が異なっていたことがいえる。住居址、竪穴状遺構などの生活遺構は今回の調査では検出されなかった。これら遺構は内部及びその周辺から出土した土器によって、構成された時期に時間差があることが考えられる。

第2節 遺物

遺物は北側区では旧石器時代の集積状遺構内から石皿が1点のみ出土し、南側区では土器片・石器類が出土したが、持ち帰った石器類を水洗いをした結果、自然縛が多数含まれていた。南側区の調査地より出土した遺物で、番号を付けて取上げた総数は846点であった。

出土した土器は特徴から大きく第I類から第IX類に分類した。出土した土器は縄文時代早期のもので主体となるのは貝殻文系の土器である。I類は文様の方法から更に細分し a類からd類とした。I類は前平式土器の範疇に入るものと思われる。a類としたものは口唇部にも貝殻条痕文を施しており、古い前平式段階のもので岩本式土器に近いものである。b類は口縁部が平口縁にはならず、若干ゆがみ2箇所あるいは4箇所の稜をもつものである。c類土器は口縁部に縦位の貝殻刺突文を連続的に横位に施し、胴部は幅狭の浅い貝殻条痕文を横位に施している。d類は口縁部の貝殻刺突文を横方向に行っているもので、前平式土器の終末期のものと思われ、次の吉田式土器へと変遷する過程のひとつと考えられる。前平式土器の時間差が伺われる資料である。II類は吉田式土器の範疇に入るものの胴部に貝殻腹縁部による押し引き文を横位に施すものであり、押し引き文と条痕文を交互に施しているものもある。III類土器は貝殻腹縁部による刺突文を施しているもので、連点状に施しているものも見られる。既存の土器型式では下剥峯式土器に最も類似する。IV類土器は器壁が厚く、口縁部に棒状工具で数条の連点状の刺突を横位に施し、繊維質のハケ状工具で外面に施文を行っている。口唇部には細かい縦位の刻みが見られる。口縁部は平口縁にはならず、波状を呈するものと思われる。貝殻を使用しない施文スタイルで、型式は類例が少ないため不明であるが、縄文時代早期後葉のものと考えられる。V類土器は口縁部がラッパ状に外反し貝殻刺突文、貝殻条痕文を施している。既存の土器型式では縄文時代早期後葉の塞ノ神式土器の範疇に入るものである。VI類土器は上位から中位にかけて貝殻条痕文を斜位に施すものである。底部立ち上がりから下位にかけて施文は見られない。器形は口縁部があまり開かず、直口に比較的近いもので、塞ノ神式土器のバリエーションの一つであると考えられる。VII類土器は傾きがきつくなるタイプのもので、浅鉢ではなく別の器形の可能性を含むものである。型式は不明である。VIII類土器は無文あるいは文様がはっきり確認できないものを一括した。いずれも胴部片である。IX類土器は底部片を一括した。

土器片は縄文時代早期前葉の前平式土器から後葉の塞ノ神式土器まで出土しており、遺跡内で時間差があることが伺われる。

石器は北側区より、旧石器時代末期の集積状遺構内から台石・石皿類が1点出土している。石材は砂岩である。集積状遺構内のものであるため、構成する他の縛にも石器の可能性があったが、製作痕や使用痕が見られるものは含まれていなかった。

南側区では石礫、スクレーパー、水晶製剥片、磨石・敲石類、砥石、台石・石皿類など361点が出土している。石礫は磨製・打製とあり基部に抉りをもつものなどがあり、石材は島外から持ち込まれた安山岩や黒曜石が用いられている。水晶製剥片がまとまって出土しているが製品は出土していない。種子島にも水晶を産出する地があっても問題はないが、現在のところ産出地の特定はできていない。またこれら水晶が島外から持ち込まれたものである可能性もあり、今後の検討課題でもある。磨石・敲石は多数出土しているが、台石・石皿類の出土は少なかった。大小の自然縛が129点出土しており、台石・石皿として使用する目的で持ち込んだが、何らかの要因で製作するまでには至らなかつたものと考えられる。石礫から、中小動物の狩猟を行っていたことが伺われる。また磨石・敲石類の出土が多いことから、植物性食料の依存度が高かった点が考えられる。

第3節 総括

遺跡は海岸部に極めて近い台地の先端部に形成されている。周辺には川が流れ、遺跡の東側には太平洋を望むことができる。

旧石器時代の集積状遺構が検出された調査地北側は遺跡の先端部に位置する。眼下には大川田川が流れしており、今回検出された集積状遺構の石材である砂岩はこの大川田川や海岸部に露出しており、入手は容易にできたと思われ、水を確保するのにも適した場所である。これらの条件がそろっていたことにより、この地に遺跡が形成されたと思われるが、集積状遺構のみの検出であったため、芦野遺跡における旧石器時代の遺跡の広がりや性格、位置付けなど詳細を明らかにすることはできなかった。

縄文時代においては、縄文時代早期前葉から後葉までの遺物が出土し、遺構は配石・集石・土坑が検出された。配石、集石を構成する礫は全て砂岩であり、礫が熱を受け赤化し、熱破碎を受けているものもみられることから、調理場として利用されたものと思われる。遺構内から出土した土器によって、これらの遺構が同時期に形成されたものではないことも確認された。住居址・堅穴状遺構など生活遺構等は今回の調査では検出されなかった。

年代測定は調査地南側区の遺物集中出土地5・6内で採取した炭化物を行っている。遺物集中出土地5では補正年代で 7720 ± 50 B.P.、曆年較正年代で紀元前6,496年 - 8,588年(cal BC以下略)、遺物集中出土地6では補正年代で 7458 ± 42 B.P.、曆年較正年代では紀元前6,239年 - 8,366年がでており、縄文時代早期の年代を示すものである。集中出土地5内の土器は第V類の貝殻刺突文、貝殻条痕文を施す。塞ノ神式土器が出土しており、集中出土地6内の土器は第VI類の貝殻条痕文のみを施す塞ノ神式土器が出土している。今後は遺構内炭化物の分析も重要であるが、さらに土器付着炭化物の曆年較正年代資料を増やし検証を行っていかねばならない。

本遺跡出土の土器はすべて縄文時代早期に位置付けられるものであり、前平式土器、吉田式土器、塞ノ神式土器、型式不明な土器などが出土している。遺物の出土量は前平式、吉田式、塞ノ神式、下剥峯式系、型式不明土器の順であるが、郡を抜いて出土量が多いといったものは見られない。無文・貝殻条痕文系・磨耗により文様がはっきりしないものも出土している。土器で特に注目されるのは、前平式土器である。出土の分布は調査地南側区北よりの西側壁面周辺に集中している。また前平式の前段階である岩本式土器に近いもの(54・55)や、従来の前平式、前平式土器から次の段階である吉田式土器へ続く過渡期のもの(63～65)など、数段回に分けられるものが出土したことは大きな成果であった。

II類とした胴部に貝殻押し引き文を施した吉田式土器は本調査では口縁部の出土は見られず、遺物の量も少なかったが、芦野遺跡周辺の「鉢ノ刃遺跡(西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書15)」「日守遺跡(西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書10)」・「三本松遺跡(平成17・18年度発掘調査・現在整理作業中)」の調査では、多量の吉田式土器が出土し、吉田式の段階ではかなり充実した地域といえる。これらの遺跡から出土した吉田式土器の共通する大きな特徴は口縁部下のクサビ形貼付文が見られないこと、クサビ形貼付文から変化したと思われる縦位の貝殻刺突文を施すもの、口縁部下に横位の貝殻刺突文を数条施すものなどが挙げられる。器形は円筒や、口縁部に4箇所の稜をもつが底部は丸底であるため円角筒となるもの、口縁部に2箇所の稜をもち、上面觀がレモン形を呈するものなどがある。特に平成17・18年度に調査を行った三本松遺跡ではパンケース100箱を超える、多量の吉田式土器が出土している。種子島で多量の吉田式土器が出土した地域は少なく、吉

田式土器を研究する上で貴重な資料であり、なぜこの地域に充実した資料がまとめて出土するのかなど、今後検討していかねばならない。

Ⅲ類土器は器面に貝殻刺突文を施すもので、既存の土器型式では下剥峯式土器に最も類似するものである。出土の点数は数点であり、それほど多くはない。下剥峯式土器は西之表下剥峯遺跡を標識遺跡とするもので、器面に貝殻刺突文のみを施し、バケツ状の器形を呈するものである。口縁部は直行ないしわずかに内湾し、口縁部や胴部に瘤状突起が付くものもある。胴部の文様は単純なものや横位、鋸歯状に施すものなどがある。現在までのところ、下剥峯式土器は種子島、大隅半島域、宮崎県南部を中心に分布しているものである。

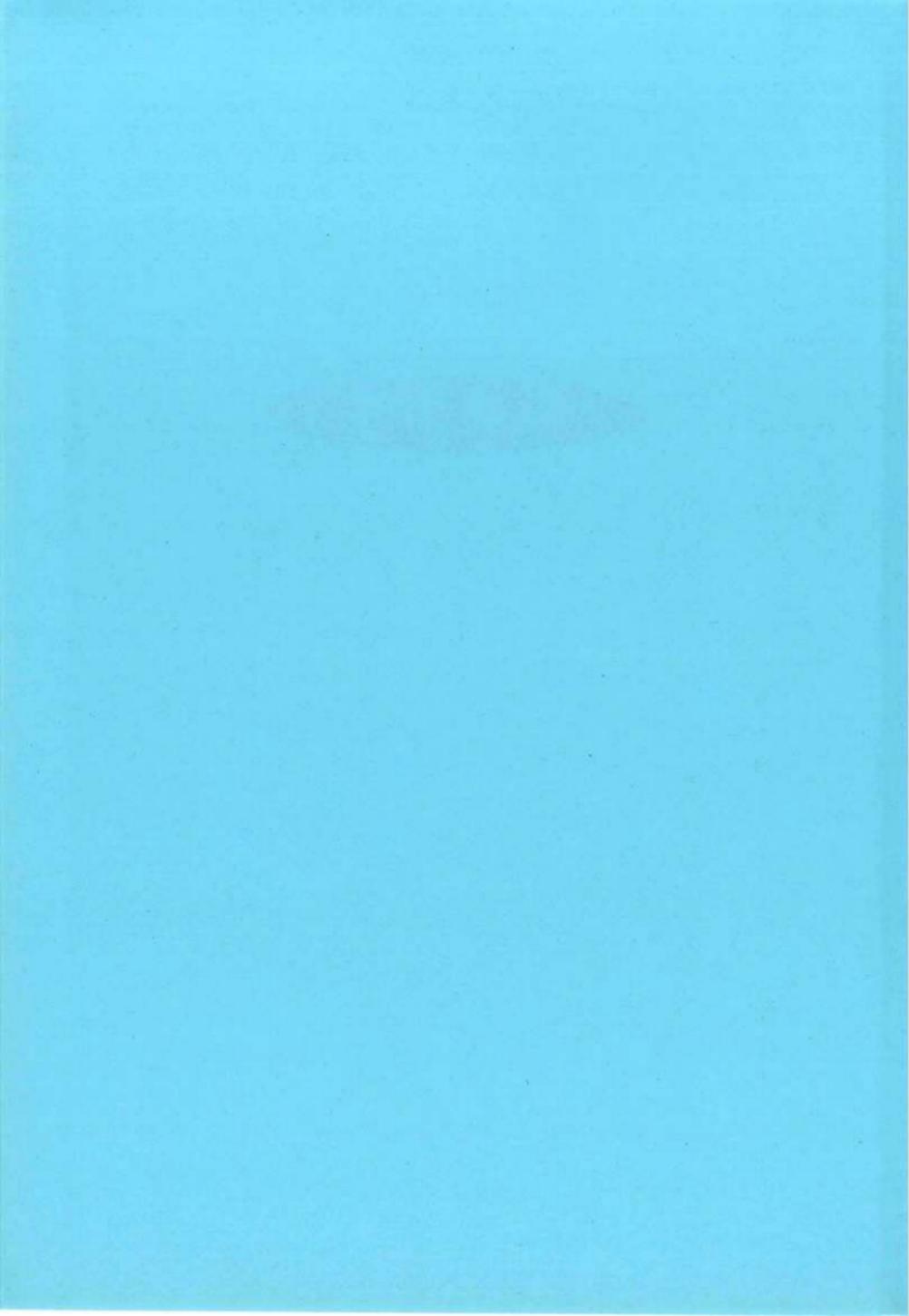
IV類土器は型式不明の土器である。縄文時代早期の土器の多くに見られる、貝殻文系の土器とは異なり、工具での刺突、繊維質のハケ状工具を用いて施文を行っているもので、器形は口縁部が僅かであるが波状するものある。今回は縄文時代早期後葉のものとしたが、今後類例の増加を待って、再検討する必要があると思われる。

V・VI類土器は塞ノ神式土器であり、V類は遺物集中出土地5及びその周辺、VI類は遺物集中出土地6のみからの出土であり、分布に大きな偏りが見られる。

石器は石鎚、スクレーパー、水晶製剥片、磨石・敲石類、砥石、台石・石皿類の出土があり、いずれも縄文時代早期のものであるが、出土層位にそれほどレベル差もみられず、また土器型式が複数に渡っているため、個別の石器がどの土器型式の段階に該当するのか明らかにすることは困難である。特徴的なのは磨石・敲石類が出土石器の主体であることと、石斧類が1点も出土していないこと、磨石・敲石類の出土に対して台石・石皿類の出土が少ないことが挙げられる。磨石・敲石類、台石・石皿類は調理具と考えられておりセットで使用したと言われているが、今回の調査では台石・石皿類の出土が少ないと、持ち込まれたと思われる多数の台石・石皿として利用しやすい自然礫の出土となんらかの関係があるようと思われる。

遺構や遺物から本遺跡は縄文時代において、季節的な回帰場所または逗留地とも捉えることができるが、現段階ではそれらを証明することは困難である。しかしながら、今回の調査結果からは、短期間だけこの地に留まった後、再び移動しながら生活を行っていたものと思われる要素を提示してくれた遺跡であった。

写真図版





北側区



南側区

北側区・南側区調査状況

图版2



北侧区

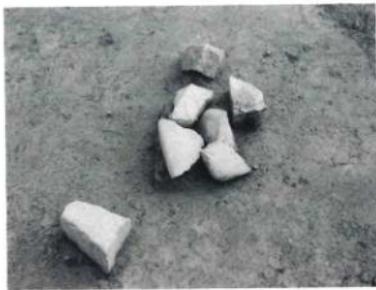


南侧区



集積状遺構下層

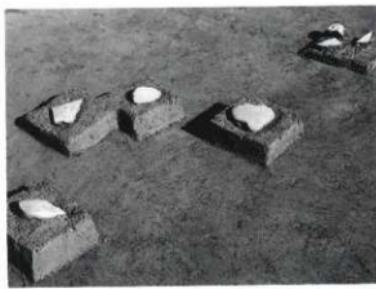
土層断面図



集積状遺構



1号配石



2号配石



3号配石



4号配石

遺構 (1)

图版 4



5号配石



6号配石



1号集石



2号集石



3号集石



4号集石

遺構 (2)



土坑



土坑



遺物集中出土 2



遺物集中出土 3



遺物集中出土 5



遺物集中出土 6

遺構 (3)

図版6



遺物出土状況（1）



遺物出土状況 (2)

圖版 8



遺物出土狀況 (3)



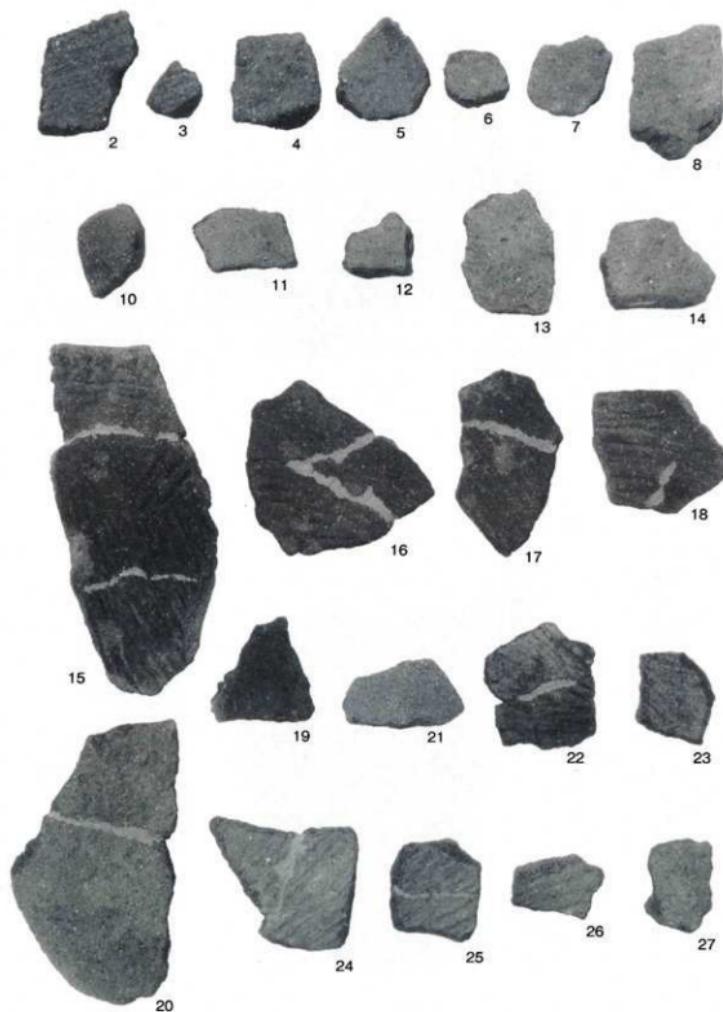
1



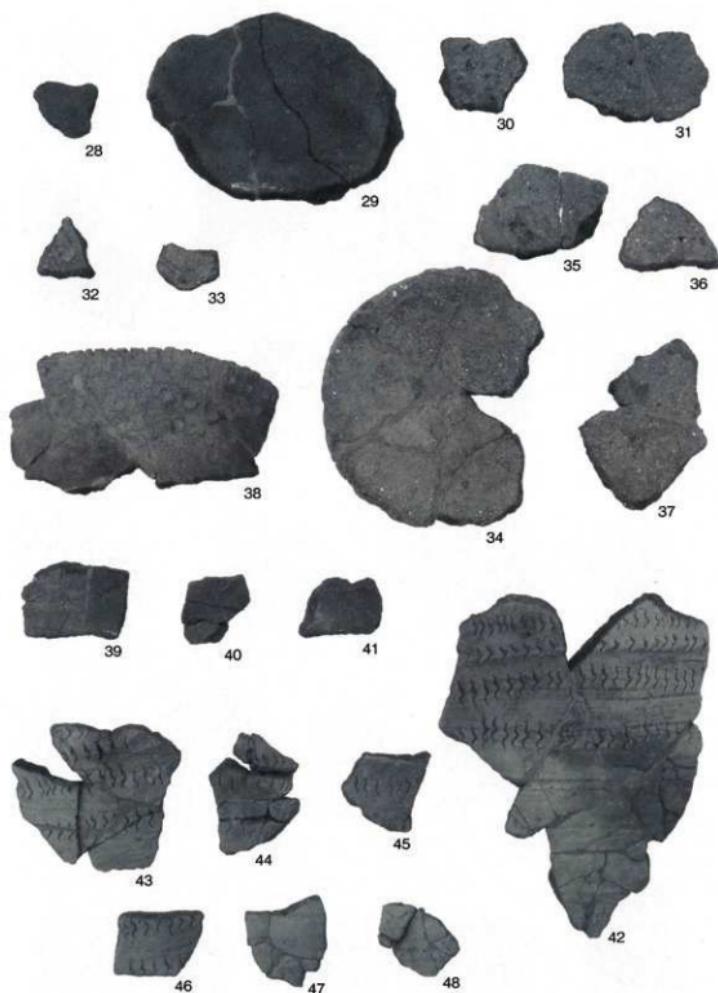
49

出土遺物 (1)

图版 10

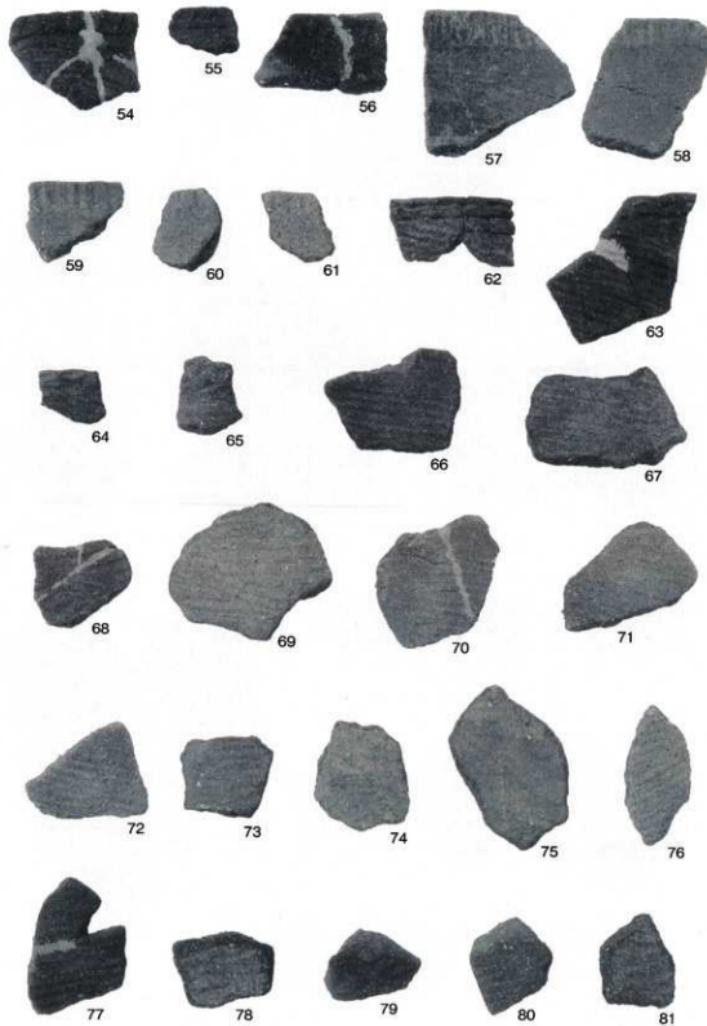


出土遺物 (2)

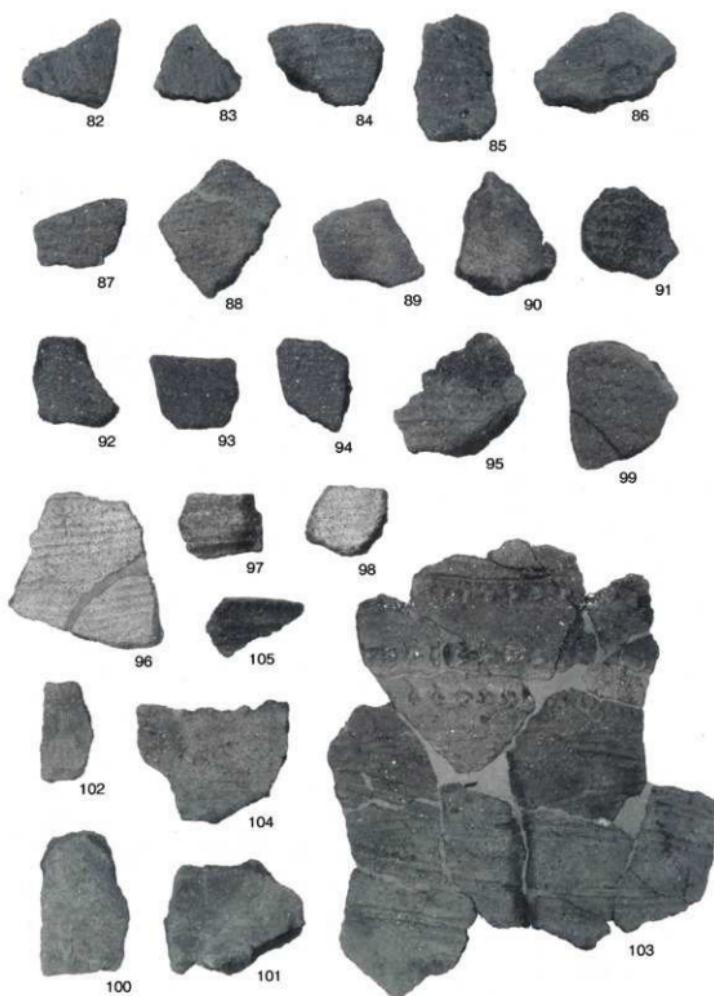


出土遺物 (3)

圖版 12

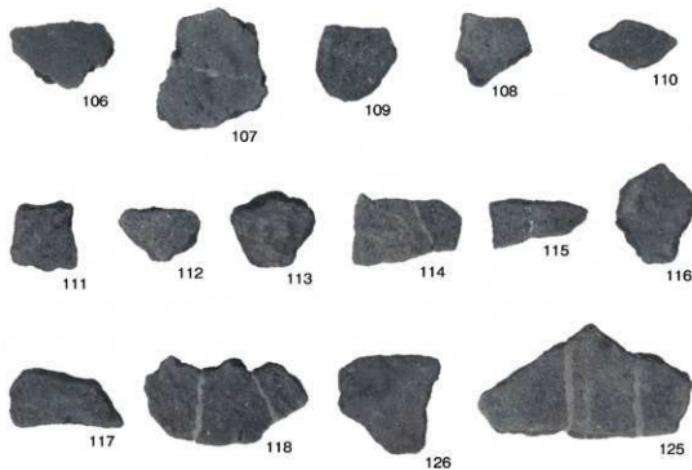


出土遺物 (4)

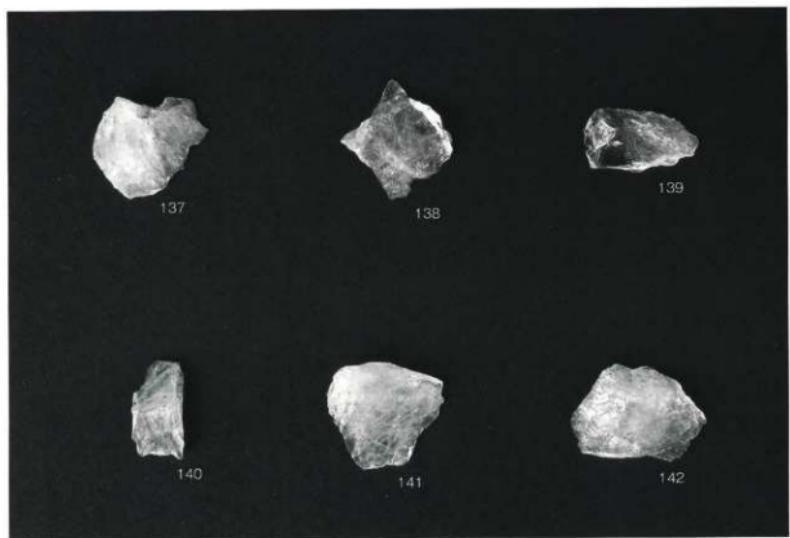
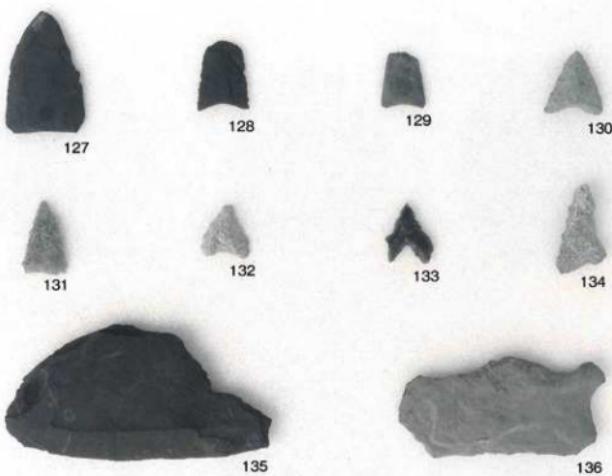


出土遺物 (5)

圖版 14



出土遺物 (6)



出土遗物 (7)

圖版 16



143



144



145



146



154



163



51

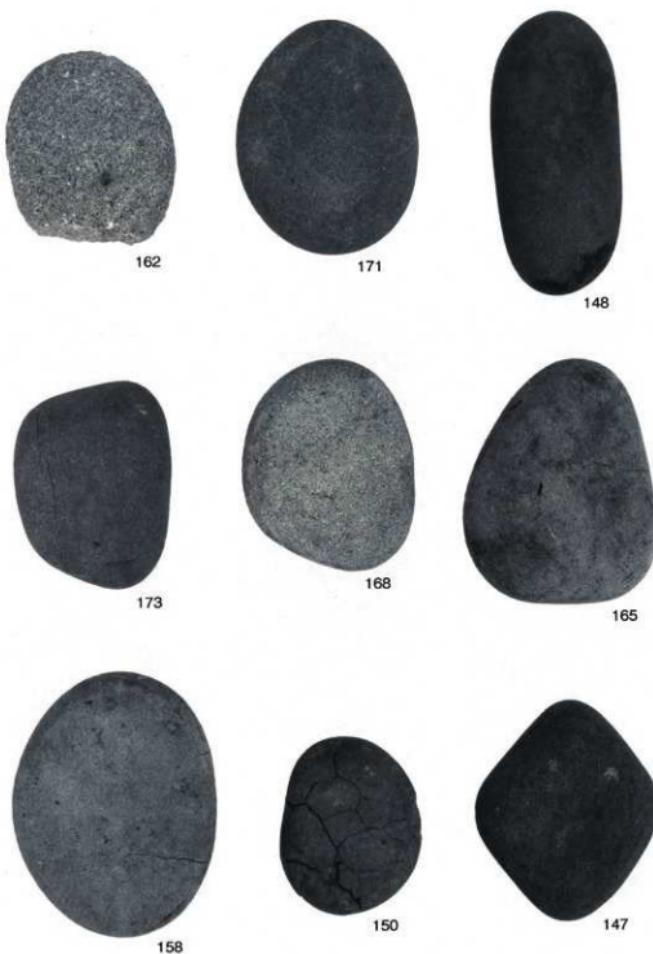


164



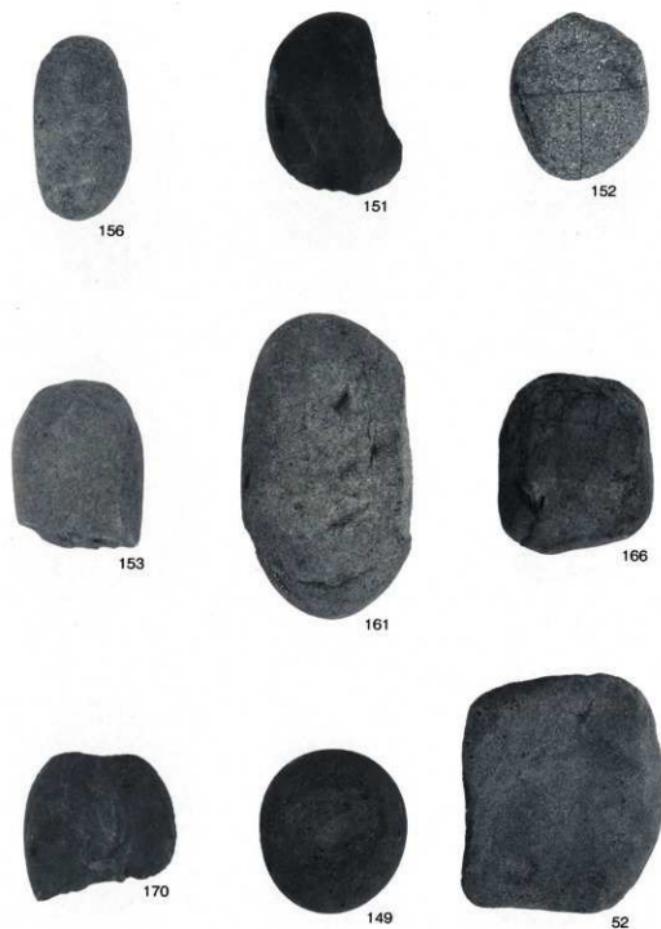
53

出土遺物 (8)

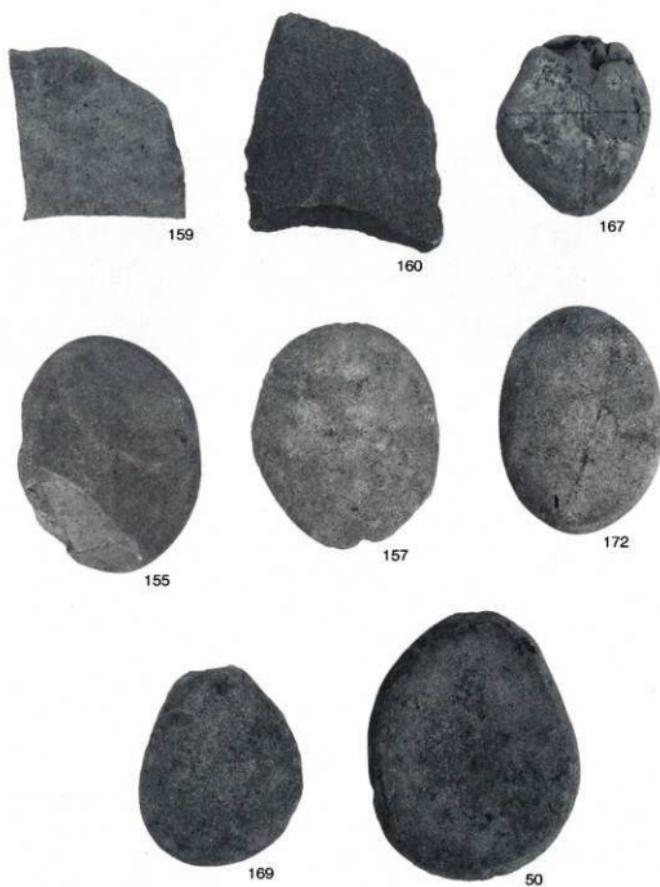


出土遺物 (9)

图版 18



出土遺物 (10)



出土遺物 (11)



174



175

出土遺物 (12)

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（20）

芦野遺跡

発行日 平成19年3月

発 行 鹿児島県西之表市教育委員会

〒891-3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地

TEL 0997-22-1111

印 刷 (有)種子島新生社印刷

〒891-3101 鹿児島県西之表市西之表16736-1

TEL 0997-22-0476